

《書評》

『中國・日本の詩と詞：『燕喜詞』 研究と日本人の詩詞受容』

靳春雨\*著、朋友書店、2023年

萩原正樹†

本書の著者である靳春雨<sup>きんしゅんう</sup>さんは、2013年に京都教育大学大学院の博士前期課程を修了し、その後立命館大学大学院博士後期課程に入学して研鑽を積み、2019年に学位を取得された新進気鋭の研究者である。評者は、たしか2012年に京都教育大学大学院在学中の靳春雨さんと知りあい、以後立命館大学において親しくさせて頂いた者であるが、同じく中国の詩詞を学ぶ者の一人として、このたびの著書出版を心から喜びたい。

本書は、靳さんの学位論文とその後に発表された論文を一書にまとめたもので、これまでの研究の成果を示すとともに、今後の展望を開くものとなっている。以下、本書の内容の一部を紹介しながら、その学術的な意義などについて触れておきたい。

本書第一部の「『燕喜詞』研究」は、学位論文を基に、その後の新たな知見などを加えて修正されたもので、南宋・曹冠の詞集『燕喜詞』をめぐる諸問題について、特にその諸本、作者の伝記、詞集の刊行者に焦点を当てて詳細に論じられている。まず第一章では、『燕喜詞』が収録されている総集である『典雅詞』について論じる。『典雅詞』は南宋の陳起編とされる総集で、宋人の詞集を収めた貴重な書物であるが、南宋臨安の陳氏書棚で刊行された坊刻本であったこともあり、完全な形では伝存していない。現在確認できるのは十四種本、十種本、八家詞本、六種本、三種本であり、その各本の内容や序跋、批注、印記などが詳細に検討され、各本の旧蔵者やその伝来の様相が明確に示されている。特に八家詞本は、これまで『典雅詞』の諸本の一つとはみなされていなかったものであるが、十種本と詳細に比較することによって、十種本の底本であることが明らかにされた。次に、『典雅詞』本以外の『燕喜詞』の刊本や鈔本について論じる。現存の刊本やその底本として用いられた伝鈔本について、現存の諸本の異同を綿密に比較することによってその系統を推測し、特に清代における『燕喜詞』の複雑な流伝の状況を、現時点で可能な限り明らかにしている。

また第二章では、『燕喜詞』の作者である曹冠の伝記について考察する。南宋初期の詞人・曹冠は、かつて秦檜の門客としてその孫の壘を教えたことがあり、そのため曹冠は秦檜の一派とされて当時の資料において言及されることはほとんど無かった。曹冠の伝記については、これまで断片的な事実しか伝えられていなかったのである。だがこれに対して、『燕喜詞』や『全宋文』、また従来注目

---

\* 志學館大学人間関係学部人間文化学科講師（刊行時は立命館大学立命館アジア・日本研究機構専門研究員）

† 立命館大学文学部教授  
hagiwara@lt.ritsumei.ac.jp

されていなかった資料や地方志等を用いて曹冠の生平を明らかにしようとするのが本章である。本章での検討の結果、曹冠が大観4（1110）年に生まれ、紹熙元（1190）年に亡くなったこと、また紹興24（1154）年に甲科に登第したこと、その後秦檜の一派とされて弾劾されたが乾道5（1169）年に第二甲第七人で再及第したこと、その他これまで知られなかった官歴や遊歴、交友、さらには現存の詩文の制作年など、多くの事実が明らかにされている。

第三章は、『燕喜詞』の刊行に尽力した詹公（詹駉）についての考証である。詹駉は状元であったが、その詳しい事跡はこれまで不明であった。宋代に状元となった詹駉という名前の人物は二人いたが、そのうち南宋の詹駉について考察する。本章においても、これまで使われることの無かった地方志等を用いて、詹駉の家門と系図、また『燕喜詞』の序文を書いた詹倣之と詹駉との関係について、両者が同じ淳熙2（1175）年の進士であることを明らかにし、また詹駉の生卒年や官途、作品等について、丹念な考証を行っている。

以上が第一部『『燕喜詞』研究』の概略であるが、ここまででも十分な読み応えがあり、靳さんの学問の特徴をよく示す内容となっている。その特徴は、「新資料の発見があること」「実証性に富むこと」という二点にまとめることができるだろう。

まず「新資料の発見があること」については、たとえば第二章で『全宋詩』未収の詩一首と『全宋文』未収の文一篇を補い、また第三章でも『全宋詩』未収録の詩一首を補っているのが端的な例である。『全宋詩』『全宋文』は、いずれも現代の中国の学者が大型の国家的プロジェクトとして多量の研究者を動員し、宋一代の詩文を網羅的に収集整理したもので、宋代の文学や学術の研究に欠かせない資料である。この『全宋詩』『全宋文』の遺漏を補った点は、学術的に非常に高く評価すべきことである。また第三章では、『全宋詩』では北宋・真宗の作であるとされている詩について、それは誤りであり、南宋・孝宗の作であるべきだという指摘がある。この指摘は非常に妥当な見解であり、『全宋詩』の誤謬を正している点も高く評価できる。こうした新資料の発見があることで、第二章で論じた曹冠の伝記や、第三章の詹駉についての考察に厚みが増し、先行研究をはるかに凌駕する内容となっている。新資料の発見とその紹介は、今後の学術に貢献すること多大であり、本書の大きな特徴であると言えるであろう。

また「実証性に富むこと」に関しては、第一章で『典雅詞』と『典雅詞』本以外の『燕喜詞』を論じる際に、目録の記載のみに頼らずに、諸本にすべて目を通したことが挙げられる。文献学においては、当然その書物を実見して自ら調査することが必須であるが、諸種の条件から実見せぬままに論じられることも無いわけではない。だが本論文では、中国や台湾所蔵の稀覯本を一つ一つ丁寧に調査しており、その点で充分に実証的であり、その分析結果には信頼をおくことができる。こうした実証的な態度で資料に迫り、一つ一つの資料を丹念に比較検討することで、従来は『宋八家詞』とされていた清・朱彝尊蔵本が、実は『典雅詞』諸本の一つであったという大きな発見をすることができたのである。朱彝尊は清代初期の詞学に大きな影響を与えた学者・詞人であり、彼が編纂した『詞綜』は現代においても重要な詞選集となっている。『宋八家詞』本が実は『典雅詞』であったという発見は、朱彝尊の『詞綜』編纂の過程を探る上においても重要な発見であり、今後の研究に大きな影響を与えるものとなるだろう。また第二章、第三章における曹冠、詹駉の生平の考証においても、実証的な研究手法が存分に発揮され、これまで用いられることのなかった資料を丁寧に調査し、互いの記述の矛盾点などから新たな事実を引き出すなど、大きな成果を挙げている。またこのような、煩を厭わずに資料をじっくりと調査するという研究姿勢が、第一の特徴である新資料の発見を

もたらしたとも言えるのである。

さらにこうした二つの特徴に加えて、資料を正確に読解している点も特筆すべき点である。本書においては、重要な資料の引用では必ず原文の後に訓読文を付し、著者がその資料をどのように読解しているのかが示されている。その読解の正確さが、論述内容に大きな信頼性と安心感を与えているのである。中国出身の靳さんがこれほどの訓読能力を身に付けるには、相当な努力が必要であったはずであり、その学問に対する真摯な態度に深甚の敬意を表したい。

上記のように、新たに発見した資料や諸文献の実証的な検討によって、『典雅詞』と『燕喜詞』の流伝状況を明らかにし、『燕喜詞』の作者である曹冠とその刊行に尽力した詹駿について、その生平を明確にした点は学術的に高く評価できる。宋代、特に南宋においては多くの詞人が輩出し、当時の文献を読むと同時代において高く評価された詞人も数多いが、少数の例外を除いて、その作品がほぼ完全に現代まで伝えられているという例は稀である。曹冠もそれらの詞人のうちの一人であり、当時優秀であったからこそ秦檜に認められてその門客となったのであるが、逆にそのことが禍いして、彼の生涯や作品は長い歴史の中で埋没してしまったのである。近年、特に中国の学界において、こうした詞人たちを発掘してその作品や生涯を考証し、当時の詞人と詞壇の全体像をとらえようとする研究が盛んに行われているが、本書はこうした研究の中でも最上位に位置づけられるものであると評価できるだろう。

第二部「詞籍の流伝と日本人の詩詞受容」は、学位取得後に発表された論文をまとめたものである。この第二部においても「新資料の発見があること」「実証性に富むこと」という二つの特徴は遺憾なく発揮されている。

第一章は、立命館大学図書館の西園寺文庫に所蔵されている『詞綜』三十八巻本に関する論考である。西園寺文庫所蔵の『詞綜』三十八巻本に大量の書き入れがあることについては、目録にも記載されている既知の事実であるが、これについて本格的に研究した者は誰もいなかった。靳さんはこの書き入れに注目し、まず日中における『詞綜』の各版本の所蔵状況をまとめた後に、丹念に書き入れを分析検討して、その批注者は不明であるものの、詞学に相当の識見を持っていた人物であったことを明らかにする。本章は、これまで誰も注目しなかった、いわば新発見の資料である『詞綜』の書き入れを実証的に研究することにより、大きな成果を得た好論文であると言えるであろう。本章第四節には西園寺公望の詞の愛好から、日本人と『詞綜』との関わりにも及んでおり、第二章以降への優れた導入ともなっている。

以下、第二章「山口剛と詞」、第三章「和刻本元好問詩集の刊行及び日本における受容」、第四章「經學佐藤一斎の填詞六首」、付論「鄭文焯の交流について」のいずれにおいても、これまであまり注意されてこなかった書物や書き入れなどの資料を綿密に分析して実証的に研究し、そこから書物の流伝や、広く文化の受容と伝承という問題にまで説き及ぶ研究姿勢が一貫して示されており、第一部と同様に非常に読み応えのある内容となっている。

「研究とは、探偵が証拠を分析して真犯人を推理するようなものだ」。これは評者がよく院生や学生に話していることであるが、靳さんの研究は、まさにこの探偵が真犯人を追及する過程と同様であり、新たな証拠の発見や既存の証拠の整理・検討、またそれに対する丹念で実証的な分析によって導き出された「真犯人」という結論は、誰もが納得できるもので、学界においてきわめて高く評価されるであろう。本書に示された研究法や内容は、これから研究に取り組もうとする人々におおいに参考になるものである。靳さんがさらにこの研究手法に磨きをかけて、さまざまな研究課題に

取り組み、多くのすぐれた成果を挙げられるであろうことを、評者は確信している。良質の推理小説を一冊読み終えると、すぐに次の作品が読みたくなるように、靳さんの第二、第三の著書が今から待ち遠しく思われてならない。